

稱讃

一二四二号

一〇一三年二月一日発行



がんさぶつ しん
願作仏の心は

どしゅじょう
度衆生のこころなり

どしゅじょう しん
度衆生の心は

りたしんじつ しんじん
利他真実の信心なり

『高僧和讃（天親讃）』

今年のNHKの大河ドラマ『どうする家康』が始まりました。

第二話「どうする 岡崎」では、桶狭間の戦いで、家康は、菩提寺の大樹寺に逃れ、先祖の墓前で、自害しようとしませんが、本多忠政により自害を踏みとどまるところで、榊原康政が、「『厭離穢土欣求浄土』。あの世に行けという意味ではございませぬ。汚れたこの世をこそ浄土にすることを目指せ。かような意味と登譽上人様に教えてもらいました。ま、様々な解釈があるので

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

しようが、武士ならば、ましてやご領主たる身であらせられるならば、かように解釈



なるのがよろしいかと。真、地獄のような現世でございますからなあ」と申し、家康は覚醒し、「厭離穢土欣求浄土」を旗印に、岡崎へ悠然と行軍しました。

一説では、登譽上人が「厭離穢土欣求浄土」という言葉を家康に直接、説いたと言われております。

松平家の檀那寺であった大樹寺の本堂には、登譽上人直筆の「厭離穢土欣求浄土」が掲げられております。

「浄土」の「土」に点を加えて「土」と書かれており、この戦の絶えないこの世を戦のない平和なこの世にすることを強調されていきます（穢土も「土」となっているものもあります）

家康の「厭離穢土欣求浄土」の旗印にはもう一つ説があります。『柳宮秘鑑』によると、家康が三河国を治めていた永祿五年（一五六二年）から同七年にかけて、一向一揆が苛烈を極めた際に大樹寺の住職だった登譽は家康に味方し、家康から御旗を賜ると自筆で「厭離穢土欣求浄土」と記して、檀家たちはその御旗を先頭に一向衆に攻め入り勝利を得たとされる。御旗の「厭離穢土欣求浄土」は「生を軽んじ、死を幸いにする」という身構えを示したもので、これは一向一揆側が自分たちの鎧に「進是極楽退は無間地獄（前進すれば極楽、退却すれば無間地獄）」と記したことを聞いて、登譽住職がこの文言を書いて死を奨めそれ以来この旗は吉例とされ、御当家の御宝蔵にある、とされている。

（ウィキペディア）



徳川幕府が約

二七〇年間続
き、「天下泰
平」と言われて
おりますが、決
して平等な平和
な世界ではあり
ませんでした。
古今東西、誰も
が戦争の無い、
平和な且つ平等
な社会を望んで
おり、それぞれ
の国の政治を司
る人々に期待し
てしょうか？

現在の政治・世界情勢でも、ロシアのウ
クライナ侵攻も一年が経とうとし、既に戦
争化しているのに誰も止めることが出来ず
にいます。被害者と言えるウクライナでも
ゼレンスキー大統領を支える高官が汚職を
している実体が明るみにもなりました。

この大河ドラマでは、権力を持つことが
主導者ではなく、平和な平等な社会にして
いく意志を強く持ち実践するもの（家康が
そうだと言うことではありませんが）こそ
が真のリーダーであり、今、求められてい
るのだと言いたいのかもしれませんね。

もしも台湾有事になったら、私はどうい
う立場でいられるであろうか？

「厭離穢土欣求淨土」

『仏説観無量寿經』では、韋提希夫人が
息子の阿闍世に幽閉され、お釈迦さまが目
の前に現れたとき、「この濁悪の処は地
獄・餓鬼・畜生盈満し、不善の聚多し。願
はくは、われ未来に悪の声を聞かじ、悪人
を見じ。・・・われに教へて清淨業処を觀
ぜしめたまへ」と言われました。

また、日本淨土教では、源信和尚の『往
生要集』に「厭離穢土欣求淨土」が出て参
ります。そこには、念仏の一の門に十門あ
り、「一は厭離穢土、二は欣求淨土、・・・
十は問答料簡なり。これを座右に置きて、
廢忘に備へん。」と。また、「大文第一に
厭離穢土といふは、それ三界は安きことな
し。もっとも厭離すべし。いまその相を明
かすに、総べて七種あり。一は地獄、二は
餓鬼、三は畜生、四は阿修羅、五は人、六
は天、七は総決なり。」とあります。

この現世だけを「穢土」というのではな
く、三界（欲界・色界・無色界）全てを指
しておりすが、一般的には「現実の世の
中は、穢れた世界であるから厭い離れ、次
生において清淨な仏の国土に生まれること
を願い求めることとされる。阿弥陀如来の
極樂世界は清淨な国土であるから、そこへ
の往生を切望するという思いが込められて
いる。（ウイキペディアより）
もっと言えば、『現実逃避』と誤解され

てもいるようです。

親鸞聖人は、「厭離穢土欣求淨土」の言
葉は一度もお使いになつておりません。

『愚禿鈔』に自利真實を「厭離真實」と
「欣求真實」の二種に分けて、聖道門の自
力は厭離を本とし、淨土門の自力は欣求を
本とすると述べられています。

つまり、聖道門は、自ら現實を見据え、
人々を救うべく仏に成ろうとするもので、
淨土門は、淨土に生まれて仏に成ろうと願
うことで、現實の人々を救わんとするもの
と言うことでしよう。

しかし、親鸞聖人の「横超の他力」は、
阿弥陀さまが、この私を仏に成らしめるた
めに、淨土に生まれさせようとなさってい
る（願作仏の心）と言われます。その阿弥
陀さまの「仏に成さしめんとする願心」とは
「度衆生のところなり」と言われます。

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』で、地獄に墮
ちた凶悪犯の犍陀多は、生涯一度だけ蜘蛛
を救ったことがあるということが、「度衆
生のところ」なのでしょう。私たちが他を
救わんとする思いが一瞬でも起れば、それ
は阿弥陀さまが、この私を仏に成さしめよ
うとの願心の証というのでしょうか。そして
阿弥陀さまの「仏に成さしめる」願心は、
「一切の衆生を救わん」心であり、それが
「真實の信心」だとおっしゃっておられま
す。他を方を思いやる心は、自身が起こし
ているのではない謙虚さが大事ですね。

現世利益和讃について

十四首目

むげこうぶつ

無碍光仏のひかりには

むしゅ あみだ

無数の阿弥陀ましまして

けぶつ

化仏のおのことごとく

しんじつしんじん

眞実信心をまもるなり

『生命環流 浄土和讃を読む 下』

大峯 顕師 著

交響する南無阿弥陀仏

無礙光仏の光とは阿弥陀さまの光です。天親菩薩は『浄土論』において、南無阿弥陀仏を「帰命尽十方無礙光如来」と表現しておられます。「世尊我一心帰命尽十方無礙光如来」とは、私は尽十方無礙光如来、つまり阿弥陀如来に帰依します。と言われた言葉です。天親は唯識学派を開いた大哲学者ですが、その方が最初に南無阿弥陀仏に帰依しておられるのです。南無阿弥陀仏に帰依するというのは、人間の知識を超えた如来の命に自分の命を預けるということです。

一般には、天親菩薩のような仏智の世界に通暁した大哲学者は、お念仏を称えることはなかったのではないかとされます。ところが本物の哲学者になると、そういう学識の枠が破られて南無阿弥陀仏に帰依するという心が出てくるのです。

その無礙光如来の放つ光芒の中には無数の阿弥陀さまが化仏としていらつしやると、親鸞聖人は言われるのです。唯ひとりの阿弥陀さまが光を放つというのであれば、キリスト教のような一神教の神のあり方と変わりません。ユダヤ教やキリスト教では、宇宙を創造した神はただひとりです。他の神々の存在は認められませんから、これはどうしても争いを生み易くなりま

す。ところが浄土真宗は、弥陀一仏とは言いますが、一神教の神とは本質的に違います。阿弥陀さまの光の中には、不思議にも無数の阿弥陀さまがいらしやるからです。これを化仏と申します。阿弥陀さまがさまざまな形を変えて現れたあり方です。一なる如来の中に多くの如来があり、それらの多くの如来の一つひとつの中に唯一の如来がいるという、重層的な一即多、多即一の世界です。その一人ひとりの化仏が、みな眞実信心を護るはたらきをなさるのです。これまでは「念仏のひと」を護ると言われていました

が、ここでの表現は違います。「眞実信心を護る」という表現は、護られるとは一体どういうことかということを経密に教えているのです。普通の場合は、その人を護るというでしょう。たとえば、その人が災害に遭わないように護ると言います。しかし眞実信心を護るとは、その人が尊い信心の世界からはみ出さないように護るといふことなのです。その

人が病気になるように護るのではなく、その人から眞実信心が失われないように護る。これが本当に護られるということでありま

す。私たちが仏さまに護られるとは、実はそういうことなのです。病気になるように護るとか、お金がたくさん儲かるように護るのではなく、その人の信心がどこまでも本當の信心であるように、護られるのです。だから、私たちが信心を失わないように常に気を付けるなどというはからいは、まったく必要ないことです。なぜなら、如来さまの方が私の信心を護っていただくからです。だから、ひとたび本當の信心を得た人は、信心を失うということは決してないのです。

親鸞聖人のお手紙を拝見しますと、聖人が京都に戻られた後、関東の門弟たちの間に信心の動揺が起こっていることがわかります。親鸞聖人が関東でお説きになったことと違うことを言いふらす人が出て来たからです。これは原始眞宗教団にとつての大きな危機だったでしょう。

※近頃、妙なことを言い出す人が出て来たというあるお弟子の報告に対して、親鸞聖人はそういう人は初めから信心がなかった人だと答えておられます。初めは正しい信心の人だったけれども、この頃おかしくなったのではない。ひとたび眞実信心に遇った人は、そんなことにはならないのです。信心を失うことは、キリスト教にはあるかも知れませんが、浄土眞宗にはありません。信心が途中でおかしくなったのではなく、初めから信心に入らなかったのです。

詩人の宮沢賢治は熱心な浄土眞宗の家に育つて、小学生の頃から大沢温泉で行われた花巻仏

十五首目

なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとふれば

じつぼうむりよう しよぶつ

十方無量の諸仏は

ひやくじゅうせんじゅういよう

百重千重 圍繞して

よろこびまもりたまふなり

教会夏季講習会に参加して、暁鳥敏、多田鼎、島地大等などの法話を聴聞しています。中学に入ってから、盛岡の願教寺で、島地大等の『歎異抄』の法話を一週間聴聞したりしました。中学四年の秋には、父親宛の手紙に「歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」（『（新校本）宮澤賢治全集』第十五巻書簡本文篇、十六頁）と書き送ったりしています。ところが、家業の質商への嫌悪や将来に対する不安などから悶々とし、数年後に『法華経』に強く感動して、突然上京し国柱会というラディカルな法華経信者のグループに入ります。父親に『法華経』への改宗を迫って、父子で激しい論争をしたりしています。こういう事情から、宮澤賢治は初めは浄土真宗であったのに『法華経』に改宗したと見る研究者もいますが、私は彼は初めから浄土真宗の信者ではなかったように思います。『歎異抄』に触れた頃の彼は、純粋な少年にありがちな一時の興奮だったのでしょうか。もともとこのすぐれた詩人は非常に自力的で、『法華経』向きの人だったように思います。真実信心の人は、信心を失ったりしません。その信心を失わないように如来さまが護っていただくから、おまかせしておけばよいのです。信心を失わないようにいつも気を付けなければならぬのなら、それは疑の心であって信心ではないでしょう。

※「慈信坊が申すことによりて、ひとびとの日ごろの信のたろろきあうておはしまし候ふも、詮ずるところは、ひとびとの信心のまことならぬことのあらはれて候ふ。」

（『親鸞聖人御消息十七通』より）

この最後の一首は、実に世界に対する親鸞聖人の大肯定というものの表白であります。名号が交響しているこの世界は何という良い世界だと世界をまるごと肯定しておられるのです。十方に充ち満ちておられる無数の仏さまが、信心の私を百重にも千重にも、とり囲んで護ってくださいます。この和讃は、満天の星の下で口ずさむのにふさわしい和讃だと思います。星の数ほどの仏さまの声がとり巻いてくださる世界の中に、私たちは生きています。私たちは仏さまたちに取り囲まれているのです。地球は惑星の一つですから、私たちの足下にも無数の星があります。それほどの十方無量の仏さまが百重にも千重にも私を取り囲んで、喜び護っていただくのです。

私たちは阿弥陀さまを信じると、諸仏たちが喜ばれるのです。十劫という永遠の昔、阿弥陀さまが成仏されたことを諸仏は喜ばれたのです。諸仏というのは、阿弥陀さまを褒め称える仏さまたちのことです。『大経』の第十七願に、たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。（『同』一八頁）とあります。もし十方の諸仏が自分の名を称えることがなかったら、私は仏にならないという誓願です。一体、なぜこのようなことをお誓いになったのでしょうか。第十七願は実に不思議な願であります。念仏を唱える衆生がもし浄土に生まれなかつたら、自分は阿弥陀の正覚を取らないという第十八願は、衆生と阿弥陀さまとの関係を言ったもので、これはわかり易いでしょう。これに対して、第十七願は諸仏と阿弥陀仏との関係です。これは、もし自分が十方の諸仏に称えられるような名前になれなかつたら自分は阿弥陀の正覚を取らないという誓願であります。これはつまり、南無阿弥陀仏の名号という根源的言語に自分が成ろうという本願です。十方諸仏が称えるような名号に自分がなれなかつたら、私は決して阿弥陀の正覚を取らない。十方諸仏が称えるような名号とは何か。名だけの名ではなく、内実をともしつた名、真実の言語、すべての言語の根源としての言語ということとです。

つまり如来さまは、真実の言葉になろうという願をここで出されたのです。そして実際、南無阿弥陀仏の名号という真実の言葉になられたわけです。だから阿弥陀さまとは、とりもなおさず南無阿弥陀仏のことです。私たちは、その南無阿弥陀仏の名号に助けていただくのです。南無阿弥陀仏の名号がどんな過去よりも過去に成就しているということが、とりもなおさず私たちの助かる証拠であります。

この「よろこびまもりたまふなり」というと

ころがとても大事です。ただ護るのではありません。私たちが信心をいただいたら、最初に喜ばれるのは阿弥陀さまなのです。よく私と同じ心になってくれたと喜んでくださるのです。私たちが信心をいただいたことを、阿弥陀さまは真っ先にお知りになります。そしてその瞬間に光明を放って、私たちを包んでくださるのです『御文章』第五帖第十二通にはこのように言われています。

後生をたすけたまへとたのみまうせば、この阿弥陀如来はふかくよろこびましましてその御身より八万四千のおほきなる光明を放ちて、その光明のなかにその人を摂め入れておきたまふべし。

(『註釈版聖典』一一九九頁)

だんだんと包まれるのではなく、一瞬に包まれるのです。ありがたいという心が私たちに湧いたら、その瞬間に阿弥陀さまはそのことをすぐお知りになるのです。

そうすると、このよろこびまもるということ、お前を護ってあげるといふようなことではありません。「お前と私は同じだね」ということです。つまり、阿弥陀さまは衆生と真理の世界を共有できたことを喜ばれるのです。如来さまは、私たちと真理を共有したいと願っているのです。信心とは、その如来さまの心を私にくださることです。信心は智慧であると親鸞聖人がおっしゃたのは、実にこのことであります。

知ることと信じることは別だという宗教もありますが、浄土真宗はそういう宗教とは違うと思います。キリスト教の場合は、知と信がはっきり分かれていますので、中世の神学者たちは

いかにして両方を統合するかという問題で悪戦苦闘しています。知と信とは区別されねばならないが、両者は矛盾するものではなく、両方とも真理の源である神から起こるものだから、「不合理なるゆえに信じる」といったテルトゥリアヌスのような神学者もいます。知は信に包まれるというトマス・アクィナスのような考え方もありますが、信じることを知ることが根源的につながるということが不可能なようです。なぜかと言うと、キリスト教はイスラエルの砂漠の民から生まれた情熱の宗教だからです。ところが、その教えがローマ帝国に広がるためには、ギリシャ哲学の知の立場と和解しなければならなかったのです。ローマの教養人たちは哲学を知っていましたから、ただ神を信じなさいと言われてもすんなりといかなかったのです。信じることを知ることがなかなかひとつになりにくいのです。中世という時代は、この二つのものの統一が完全には成り立たなかった時代です。キリスト教の歴史とは、この統一のための戦いの歴史だったとも言えます。その戦いの途中でヨーロッパは中世から近世に移行したのです。そして、この問題は現代でも依然として残ったままです。

ところが、仏教では如来の智慧は如来を信じるところに与えられるのです。信じたら智慧がなくなるのではなく、本当の智慧になるのです。だから浄土真宗の信心をいただいた人は、熱狂的になったり興奮したりすることはありません。平常心を失って、浄土真宗を一生懸命勉強していますというのは、どこかおかしいのです。外から見て、信心があるかないかわからないような顔をしている人が、本当に信心がある人なの

でしょう。阿弥陀さまは、信心の人を私と同じ真理の世界の仲間になった人だとよろこばれます。だから護ると言っても、衆生と自分とが一緒になったことをよろこび護られるのです。

南無阿弥陀仏の名号を称えようと、十方の諸仏が私を護ってくださるという不思議な世界が現前してくるのです。私たちはこの宇宙の中で決して独りぼっちではありません。私が南無阿弥陀仏と言えば、十方の諸仏がみな南無阿弥陀仏と言われます。称名が交響するそういう賑やかな世界に生きているということが、私たちが生きている本当の姿であるという教えてくださっている和讃であります。

※「浄土真宗のみ教え」やこの度の御正忌報恩講で即如ご門主が發布されたご消息「新・領解文」に《私の煩惱と仏のさとりは、本来一つゆえ「そのまま救う」が、弥陀のよび声」と述べられておられます。また、「阿弥陀さまの往相回向・還相回向のはたらきを感得(信知)する位に就く(現生正定聚)」は、現世での往生(即得往生)を意味する」との論を目にします(私はその論を間違って解釈しているのかもしれませんが)。こういうことを聞かせていただく、私のこころは動揺してしまいます。

※『現世利益和讃』を通して、お念仏・ご信心の利益は、病気などの禍に遭わない、病気が治る、幸せな生活が送れるというのではなく、諸仏をはじめ、天地の神々は、私の動揺に拘わらず、阿弥陀さまのご本願「必ずあなたを仏にします」との真理は揺るぎないものであると、気づかせようと働いていることが現世での大きな利益だと述べておられるのでしよう。

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

第一段 お念仏のこころ

南無阿弥陀仏

はじめに、六字の名号が掲げられます。この

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の 弥陀のよび声
私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ

「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ありがとう といったいて

この愚身をまかす このままで

救い取られる 自然の浄土

仏恩報謝の お念仏

これもひとえに

宗祖親鸞聖人と

法灯を伝承された 歴代宗主の

尊いお導きに よるものです

み教えを依りどころに生きる者 となり

少しずつ 執われの心を 離れます

生かされていることに 感謝して

むさぼり いかりに 流されず

穏やかな顔と 優しい言葉

喜びも 悲しみも 分かち合い

日々に 精一杯 つとめます

名号は単に名前ではありません。阿弥陀如来の顕現したおすがたを示すものです。

親鸞聖人が名号といわれるとき、多くの場合、上に本願の語が冠せられます。「本願名号正定業」などです。他に「誓願の名号」とか「誓いの名号」などの例もみられます。これらは、名号が本願であり誓願されたそのことを表しているという意味です。本願とは阿弥陀如来が因位の法蔵菩薩であつたとき、一切の苦しみを衆生を一人のこさず救いたまうと誓われたものです。この願いが成就して阿弥陀

仏となられ、そして名号となって私をよんでくださっているのです。ですから続いて

「われにまかせよ そのまま救う」
の 弥陀のよび声

とあります。「そのまま救う」が阿弥陀如来の願いですので、短い消息文の中に二度にわたって述べられます。親鸞聖人はこの六字の名号を《しかれば、「南無」の言は帰命なり(中略)》ここをもつて「帰命」は本願招喚の勅命なり。「発願回向」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり(註釈版聖典「70頁」)として、阿弥陀仏が名号となつて煩惱に覆われる私の上に届き「まかせよ、わが名を称えよ」とよびかけてくださるすがたと味わわれたのです。また、この名号はよび声でありますが、阿弥陀仏の功德のすべてを与えたいという慈悲のすがたでもあるのです。しかも、信ずることも、念仏することも如来よりいただくものと味わわれます。

私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ
「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ここで問題は「私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ」の受け止め方です。私たち凡夫の立場からすれば異様な内容に映ります。しかし、阿弥陀如来の立場からするならば違って受けとめることができるのです。仏教では、迷いの世界とさとりの世界の両方を説きます。いま、私の煩惱と仏のさとりは本来一つと言われているのは、さとりの世界の風光を示すものです。

阿弥陀如来には絶対的な真実無相の立場と、人間を救う仏として具体的な私たちをあらわす二面性があります。それが智慧と慈悲の阿弥陀仏と言われる所以です。智慧とはさとりを指しますので、その智慧の眼で眺めた時には「煩惱と菩提は一つ」と見ることが出来ます。このさとの智慧から衆生救済の慈悲が導き出されるのですから「ゆえ」が付加されているのでしょう。

要するに阿弥陀如来のさとの智慧から「この私をよんでくださる慈悲」が出されたという意味です。この弥陀のよび声に私が呼応して「ありがとうございます」といただくのです。「そのまま救う」とよびかけてくださるのですから、素直に「この身このまま、おまかせします」と、ただただおまかせするのみを「いただく」と言っているのです。ですから

ありがとうございます といただいて

と続きます。

阿弥陀如来の必ず救うという慈悲のこころをそのまま受け入れて、この身をおまかせする。ここを「信心をいただく」と表現し、ここに他力の救いが成立します。本願を憶念して、自力のこころを離れていく、それ以外に煩惱具足の私が迷いの世界から抜け出る道はありません。

この愚身をまかす このままで
救い取られる 自然の浄土

すでに述べたように、救われるということとは如来のよび声を聞き、おまかせするということ

です。ですから、如来の側からすれば「そのまの救い」であり、私の側から言えば「このまま救われる」ということになります。

ここを「愚身をまかす」とあえて「愚身」と書いて「み」と読むように指示されています。私という愚かな身ながら「このまま救われる」ことを表そうとされているのです。そうすれば私の命が終わったその時にお浄土に往生させていただき、この私を仏にしてください。

その往生させていただく世界が「救い取られる 自然の浄土」、いわゆる極楽浄土です。浄土が自然の語によつてさとの世界であることを表そうとしています。「自然虚無之身無極之体」という經典のことばも、自然がさとりを意味していることが窺えます。

仏恩報謝の お念仏

阿弥陀如来の私をよんでくださるよび声が届いた瞬間からお浄土に寄せていただくまでのこの世での生活、それが「ありがとうございます」という感謝の念仏生活以外にはありません。「仏恩報謝の お念仏」と表現される所以です。南無阿弥陀仏と私の口からお念仏が出ます。決して救いの因として役立たせるためではありません。阿弥陀如来のご恩をよろこぶ気持ちがあふれ出たものです。仏になるべき身に育てあげていただいたご恩に対する報恩の念仏です。

第二段 師の徳を讃える

これもひとえに 宗祖親鸞聖人と

法灯を伝承された 歴代宗主の
尊いお導きに よるものです

ところで、愚身の私が往生させていただく手前は、すべて阿弥陀さまの方で完成されていますので、これを「他力」といいます。この「他力の法門」を数あるお釈迦さまの教えの中から見出してくださり、この私に至るまでお伝えくださったのは「ひとえに 宗祖親鸞聖人と 方灯を伝承された 歴代宗主の 尊いお導きによるもの」と言えましよう。親鸞聖人ましまさずば、と思うとき本当にお念仏に遇いた喜びが湧きあがってきます。そして法灯を伝承された歴代宗主のお導きに感謝しなければなりません。

※「私の煩惱と仏のさとりは本来一つゆえ」の言葉には、素直に受け入れられずにあります。一見、「梵我一如」とか「本覚思想」を肯定しているように捉えられるからです。この解説では、「阿弥陀仏の立場から・さとの世界の風光を示す」と言われております。確かに、阿弥陀さまは、私たち凡夫の衆生の苦しさ悲しさを我が事として苦しみ悲しまれると聞き習って参りました。しかし、私の方から、仏さまと同じだとは決して思えないのが凡夫であることを心得ておかねばならないと思います。

※蓮如上人の「領解文」では「善知識」と言われているところを、あえて「歴代宗主」と言い換えられております。「愛山護法」の思いが段々と薄れていき、将来の教団の有り様を危惧していることあるのかなあとありますが、権威を誇示することになってはいけません。

稱讃寺 行事予定

二〇二三年 二月の行事予定

六日(月) のんのん法話会 一四時

一六日(木) のんのん法話会 一四時

二六日(日) のんのん法話会 一四時

※住職は、二月二十二日(水)夕刻から二十三日(金)まで、京都に出向し不在になります。

お慕 によろ
拝む如素に

お慕
拝まれて

二〇二三年「心のともしび」二月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。

合掌

記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 01000-4-69957
加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行
店名 一〇九(イチゼロキュウ)店
番号 当座 0069957
名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記(愚案)

今年一月十二日、作家で精神科医の加賀乙彦氏が九十三歳でお亡くなりになった。十九日の朝日新聞の「天声人語」には、「死とは何か。生きるとはいったい何なのか。そんな根源的な問いを投げかけ続けた加賀さんが逝った▼若いころ、東京拘置所の医務技官として多くの死刑囚や無期囚と面接した。気づいたのはあす死ぬかもしれない死刑囚たちが「時間をギューツと凝縮」して興奮状態にあつたこと。対照的に、無期囚は死の問題をわざと遠ざけて「無限に薄められた時間」を静かに生きていた▼私たちの死への意識は死刑囚と無期囚の中間にあるのだろう。でも、ときには死刑囚のように「真剣に死と対決しておかないと、いざ突然死が迫ってきた時に間にあわない」(『生と死と文学』)と加賀さんは記した▼死は誰にも確実な未来である。筆者を含め多くの人は考えるのを避けがちだが、これに正面から向き合う社会の大切さを説いた。自伝では「なにも恐れることはない」とも語っていた。≧との記事がありました。

「私に任せなさい」との阿弥陀さまのご本願に照らされている「いのち」と聞き知るところには、最期には「恐れ」はなくなっている。